

機能から見た英国のヴィジュアル・エレメント

織 田 芳 人*

British Visual Elements from the Viewpoint of Function

Michito ODA

I はじめに

既報「英国の臨海地域に見るヴィジュアル・エレメント」¹⁾で、海をイメージさせる、あるいは、臨海地域であることを感じさせるヴィジュアル・エレメントを考察した。その結語でも記したが、実際には、臨海地域といった広い地域で括ることのできるヴィジュアル・エレメントを見出すことがなかなかむずかしい。

しかし、もっと狭い区域でイメージが共有されていると思われるヴィジュアル・エレメント、あるいは、単純に「物」と「物」との緊密な関係性が感じられるようなヴィジュアル・エレメントの事例は、かなり見受けられる。そこで本稿では、それらの事例を挙げながらヴィジュアル・エレメントに関する考察を進めていきたい。

また、同じ既報で、西沢健によるサインの分類項目（下記）に倣えば、ヴィジュアル・エレメントを分類することもできそうである、と述べた。

- ① 印としてのサイン：他のものとの区分識別を主とした自己表現のためのサイン。
家紋、国旗、商家の看板、まといなど。
- ② 象徴としてのサイン：抽象的な意味をもつ事象等、不可視の対象を目に見える象徴として具象化したサイン。キリスト教における十字架、神社の鏡や鳥居など。また上記の印としてのサインも、自己あるいは集団の内容的なものを表現する場合には、象徴的な表現となる。
- ③ 案内及び伝達としてのサイン（道路標識、地区案内板など）
- ④ 位置の確認としてのサイン（山、川、草木、ランドマーク的な建物、橋梁など）²⁾

上記の西沢による分類は、個々のサインが有する機能に基づいて行われている。これに倣って、ヴィジュアル・エレメントを機能の面から分類することも視野に入れて考察したい。しかし、これら4項目の中で、「②象徴」に関しては、西沢も指摘しているように、「印としてのサイン」も「象徴としてのサイン」となる場合があり、その判断がむずかしいと推察される。そのため、とりあえず「①印」「③案内および伝達」「④位置の確認」の3項目に関して、それぞれの事例を挙げながら考察していく。

* 長崎大学教育学部芸術表現講座（美術）

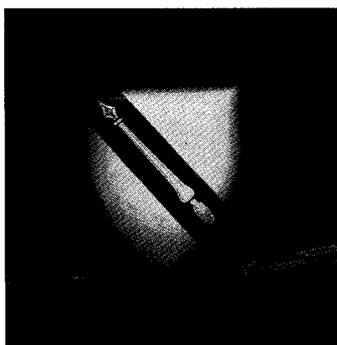


図1 シェイクスピアの紋章
Stratford-upon-Avon



図2 地区評議会の紋章
Stratford-upon-Avon

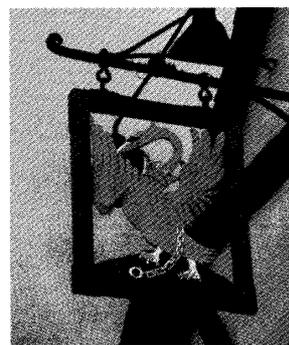


図3 ホテルの看板
Stratford-upon-Avon



図4 白鳥像の噴水
Stratford-upon-Avon

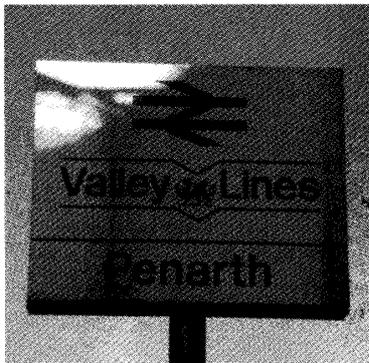


図5 ペナース駅のサイン
Penarth

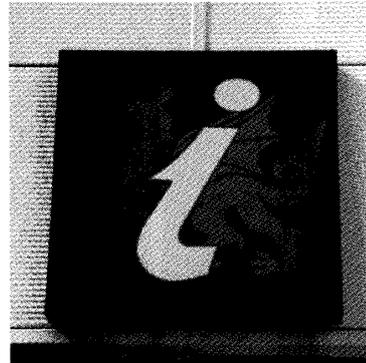


図6 観光案内所のマーク
Swansea

Ⅱ 印としてのヴィジュアル・エレメント

イングランド中部の町ストラトフォード・アポン・エイヴォンは、英国が世界に誇る劇作家ウィリアム・シェイクスピアの生誕地として有名である。図1は、シェイクスピアの生家に掲げられた紋章である。シェイクスピアの父の紋章で、斜めに描かれているのは槍である。³⁾ この紋章が、町の中にさまざまな形で存在していそうであるが、そうではなかった。

町の東南部にあるロイヤル・シェイクスピア・シアターの前に噴水を兼ねた白鳥像があった(図4)。初めて見たときには、なぜ白鳥像なのか不思議だったが、そうした疑問もしいに解けてきた。

その傍を流れるエイヴォン川に、白鳥が群れをなして泳いでいた。ロイヤル・シェイクスピア・シアターに隣接する小さめの劇場はスワン・シアターと呼ばれる。

また、この町に設置されている地区評議会(ディストリクト・カウンシル)の紋章には、2羽の白鳥があしらわれている(図2)。ホワイト・スワン・ホテルという名のホテルもある。図3は、そのホテルの袖看板である。シェイクスピアがこのホテルにあるバーの常連客だったそうである。⁴⁾

このように見えてくると、白鳥はこの町の象徴的存在であり、上述した屋外彫刻の白鳥像は「印としてのヴィジュアル・エレメント」と捉えられるだろう。



図7 案内標識の鳥像
Liverpool



図8 車止めの鳥像
Liverpool

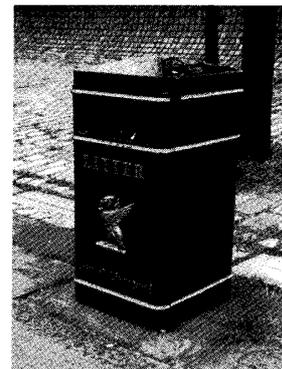


図9 ゴミ箱の鳥像
Liverpool

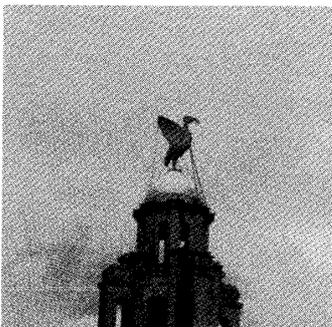


図10 ビル屋上の鳥像
Liverpool

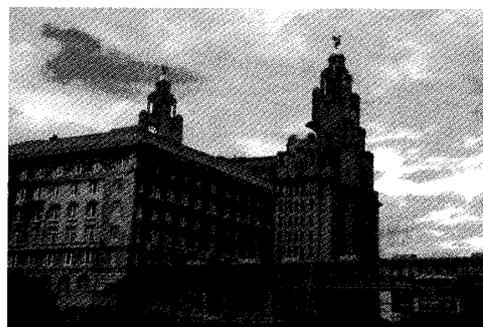


図11 ロイヤル・ライヴァー・ビル
Liverpool

ウェールズ南部の都市カーディフの鉄道駅を出ると、その前に立ち並ぶ建物の屋上に、赤い線材でつくられたドラゴン像があった(図58)。カーディフ近郊にあるペナース駅のサインにもあった(図5)。やはりウェールズ南部の都市スウォンジの観光案内所で、そのマークにドラゴンのシルエットが使われていた(図6)。ドラゴンはウェールズのシンボルである。頭に隆起があり、コウモリの翼をもち、鱗、恐ろしい爪、とげのある尻尾があるのが、ドラゴンだそうである。⁵⁾ この場合のドラゴンは、西沢による分類に倣えば、「印として」のヴィジュアル・エレメントと考えるべきだろう。

イングランド北部の都市リヴァプールはビートルズ誕生の地として有名であるが、マージー川に面したアルバート・ドックも観光の一翼を担っている。既報「英国の臨海地域に見るヴィジュアル・エレメント」では、このアルバート・ドックを中心としたウォーターフロントにおけるヴィジュアル・エレメントを採り上げた。

しかし、リヴァプールには、もう一つの「印としてのヴィジュアル・エレメント」がある。街の通りの交差点に設置された案内標識の先端に、羽を立てた鳥が立っている(図7)。同じような形の鳥が車止めに見られる(図8)。ゴミ箱にもあった(図9)。マージー川沿いに、アルバート・ドックに近接するビルの屋上に立つ二つの塔にも、似た形の鳥が見られた(図10)。この鳥は、リヴァプール市の紋章となっているライヴァー・バードである。17世紀にリヴァプールの語源を説明するために考案された架空の鳥だそうである。⁶⁾ この鳥を屋上に頂いたオフィス・ビルは1910年完成のロイヤル・ライヴァー・ビルで、ライヴァー・バードを頂く塔の高さは90メートルあるという(図11)。⁷⁾

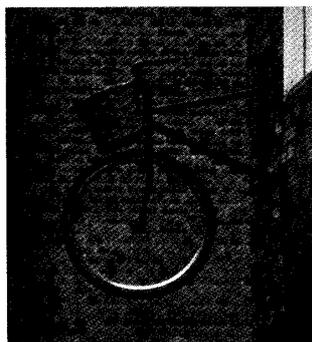


図12 自転車 Cambridge

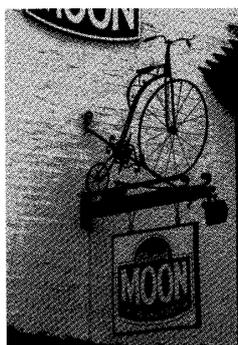
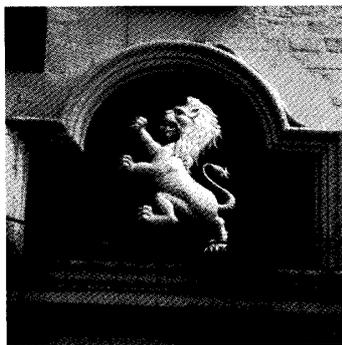
図13 自転車
Stratford-upon-Avon図14 パブの金獅子像
Dover図15 タヴァンの金獅子像
Brighton図16 ホテルの白獅子像
Penzance

図12は、ケンブリッジの裏通りで見かけた自転車のディスプレイで、自転車店のものである。といって、自転車のディスプレイが自転車店であるとも限らない。図13はストラトフォード・アポン・エイヴォンで見つけたディスプレイである。これを付けていた店舗は、エドワード・ムーンという名のブラッスリーであった。ブラッスリーとは食事也能するビアホールをいう。⁸⁾

パブも酒を飲んだり、食事をしたり、軽食を取ったりする場所である。⁹⁾ インはパブや小さなホテルの別称であるという。¹⁰⁾ ウィリアム・モリスの研究で知られる小野二郎は、インを居酒屋兼宿屋としている。¹¹⁾ タヴァンもパブやインを意味していて、大きな違いはなさそうである。このようなパブやタヴァンには、袖看板や壁看板とは別に、その名に因む像をディスプレイしているところが多い。

表現し易さもあるだろうが、ライオン像が多いように思われる。ドーヴァーのパブ「ゴールデン・ライオン」の像は、よく見ると、気の弱そうな表情をしている(図14)。同じ金獅子でも、ブライトンの「ゴールデン・ライオン・タヴァン」の像のほうがリアルである(図15)。図16は、ペンザンスのホワイト・ライオン・ホテルの浮彫像である。紋章に見られる獅子の形に近い。

ハウスのフリー・ハウス「オールド・ホワイト・ライオン」には、入口の軒の上に2頭の白いライオンが置かれていた(図17)。フリー・ハウスとは、特定のビール会社とはつながりがなく、自由に各種の銘柄を扱うパブをいう。¹²⁾ この「オールド・ホワイト・ライオン」は宿泊もできる。

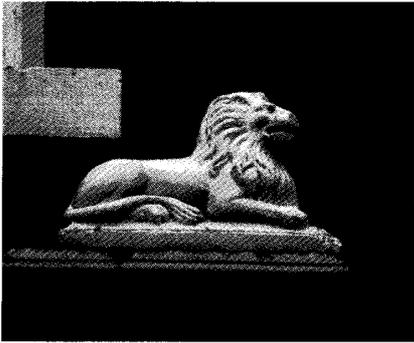


図17 フリー・ハウスの白獅子像
Haworth



図18 パブの開翼ワシ像
Cambridge

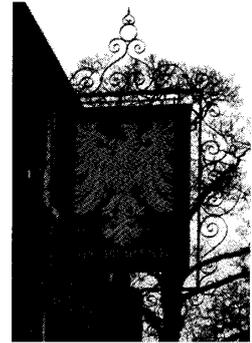


図19 パブの看板
Cambridge



図20 タヴァンの黒牛頭像
Edinburgh



図21 ティーポット
Salisbury

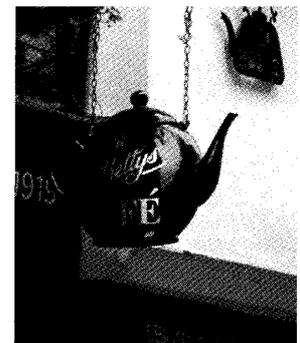


図22 ティーポット
York



図23 ケトル
York



図24 ブーツ
Oxford

図18は、ケンブリッジのパブで見かけたワシ像である。パブの名称が「スプレッド・イーグル（開翼ワシ）」で、翼がもっと開いていてもよさそうだが、とにかく、その名のとおりの形ではある。図19のような袖看板も立てられていた。図20は、スコットランドの首都エディンバラにある「ブラック・ブル・タヴァン」の牛で、暗くなると、眼が赤く光る。

ソールズベリで見たティーポットのディスプレイは、紅茶の葉やコーヒー豆をあつかう茶屋のものだった（図21）。一方、ヨークで見かけたティーポット（図22）はカフェのディスプレイだった。同じくケトル（図23）もティー・ルームのディスプレイだった。図24に示したブーツは、オクスフォードのカヴァード・マーケットに入っている靴屋のディスプレイである。

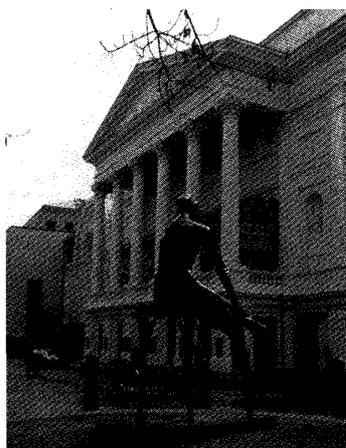


図25 ロイヤル・オペラ・ハウス
London

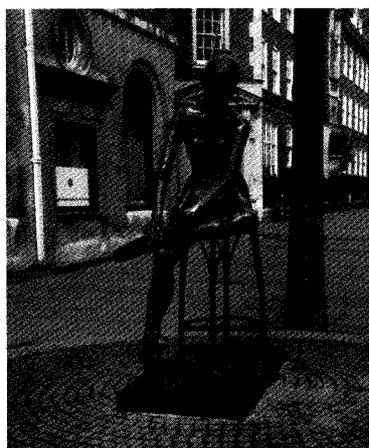


図26 《ヤング・ダンサー》
London

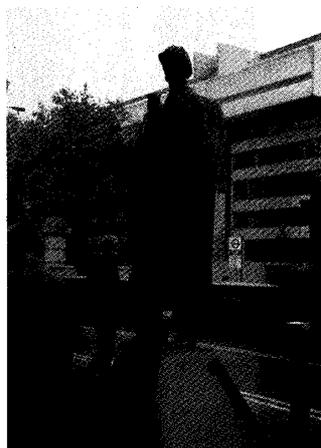


図27 シャーロック・ホームズ像
London

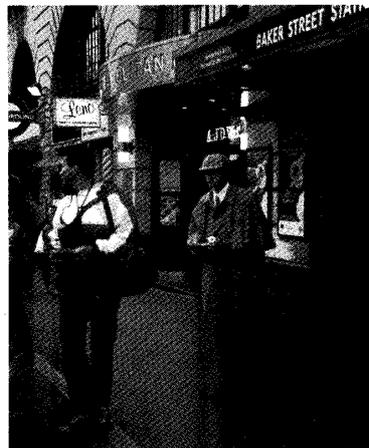


図28 ホームズに扮装した人
London

Ⅲ 案内および伝達としてのヴィジュアル・エレメント

ロンドンのコヴェント・ガーデンに、オペラの殿堂ロイヤル・オペラ・ハウスがある。古代ギリシアの神殿のようなファサードである（図25）。この建物の斜め向かいに、道路を挟んで、幅の広い歩行者専用道があり、ちょっとした広場になっている。いわば通り抜け型のポケットパークである。¹³⁾ そこに、《ヤング・ダンサー》と題する彫刻が設置されている（図26）。このダンサー像は、ロイヤル・オペラ・ハウスとの関係性から言えば、このオペラ・ハウスを案内するサインのような存在である。そうした視点で、このダンサー像を捉えるとき、彫刻としての良し悪しは二義的になってくる。

ロンドン地下鉄のベイカー・ストリート駅から通りへ出ると、シャーロック・ホームズ像が立っている（図27）。ホームズの住所、ベイカー・ストリート221Bは出版当時、架空の番地だったが、その後、番地が増えて実在することになった。シャーロック・ホームズ博物館があるのは、実際の221B番地より少し南だそうである。¹⁴⁾ シャーロック・ホームズに扮装した人が、その博物館を案内していた（図28）。



図29 博物館前の竜騎兵像
Edinburgh



図30 地下納骨所入口の修道士像 Bath

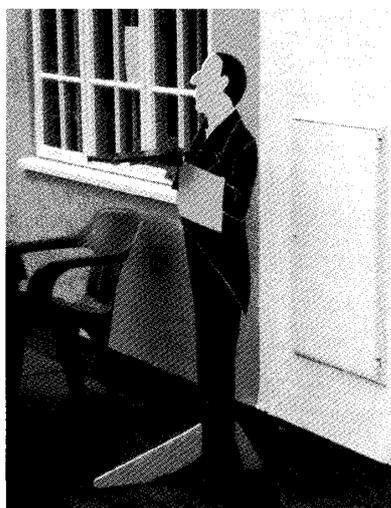


図31 レストラン入口のウェイター像
Stratford-upon-Avon

エディンバラ城内にある英国陸軍近衛竜騎兵隊博物館の前には、兵士の像があった(図29)。この像も「案内としてのヴィジュアル・エレメント」としたが、「印としてのヴィジュアル・エレメント」と捉えられなくもない。

図30の修道士を象った立像は、イングランド中央部のバースにあるバース寺院に隣接した、博物館を兼ねた地下納骨所の入口に置かれていた。この修道士の立像も「案内としてのヴィジュアル・エレメント」と考えられる。

ストラトフォード・アポン・エイヴオンでは、レストランの入口に立っているウェイターを象った立像を見つけた(図31)。レストランであることを示す看板のようにも見えるが、通常どこのレストランでも見かけるウェイターの格好であるから、「印として」捉えるのではなく、「案内として」捉えるほうが理に適っているだろう。

図60は、エディンバラの観光案内所の所在を知らせる大型のサインである。よく目立っていて、わかりやすかった。

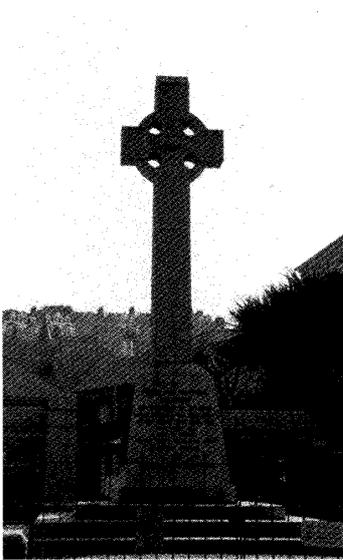


図32 戦没者記念碑 St. Ives

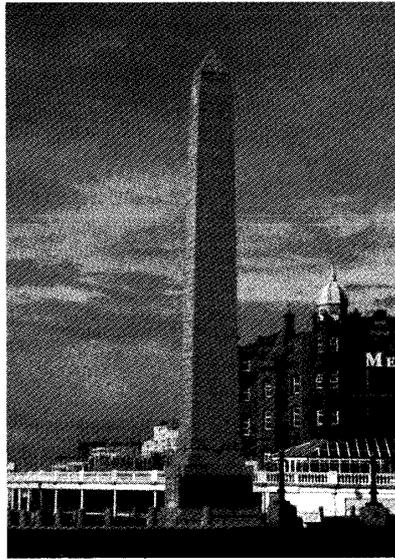


図33 戦没者記念碑 Blackpool

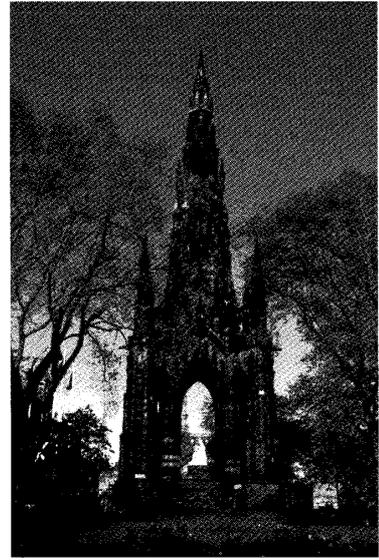


図34 スコット記念塔

Edinburgh

IV 位置の確認としてのヴィジュアル・エレメント

図32は、セント・アイヴスで見かけた、第一次・第二次世界大戦の戦没者を讃える記念碑である。ケルト十字架の形をしているが、宗教的な意味合いまではわからない。図33も第一次・第二次世界大戦の戦没者を讃える記念碑で、ブラックプールに建てられていたものである。こうした記念碑はよく見かけるが、どのような機能をもつものとして捉えればよいか判断するのがむずかしく、分類しにくい。強いて言えば、モニュメントの類は「位置を確認する」ための存在と捉えられるだろう。

エディンバラにあるスコット記念塔も同様と考えられる（図34）。スコットランドを代表する詩人・小説家のウォルター・スコットを記念した尖塔で、作家のメモリアルとしては世界最大だそうである。¹⁵⁾

図35はブラックプール・タワーである。「印として」の機能もあるが、やはりランドマークとしての機能と考えるべきだろう。スコットランド第三の都市アバディーンにあるマーシャル・コレッジも街の通りに面して際立つ存在である（図36）。1593年に創設されたプロテスタントの大学で、現在の建物は1906年に造られたという。¹⁶⁾ 大学というより大聖堂といった感じである。これもまたランドマークとして捉えられる。

ともかく、高い、大きい、派手な色、個性的な形、といった特色のある目立つ建物は、「位置の確認」としてのヴィジュアル・エレメントと考えられる。少し脇道に逸れることになるが、英国の田園地帯にあつては、教会の塔ほどランドマークになっているものはない。というよりも、いかに教会を中心として集落が形成されていったかを、否応なく知らされるのである。

図37は、イングランド東部の町キングズ・リンに近いインゴルディスソープ村の教会である。しかし、このような場合、教会はランドマークであるとともに、そこに、あるいは、その近くに集落が存在することも伝えていて、「案内および伝達としてのヴィジュアル・エレメント」と見なすこともできるだろう。

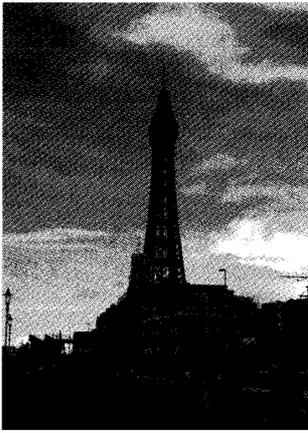


図35 ブラックプール・タワー
Blackpool



図36 マーシャル・コレッジ
Aberdeen

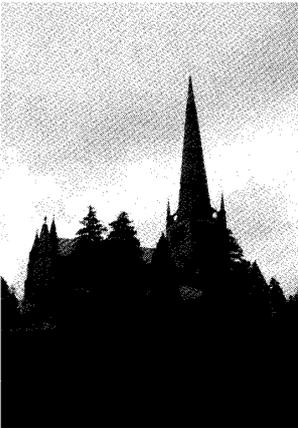


図37 教会 Ingoldisthorpe

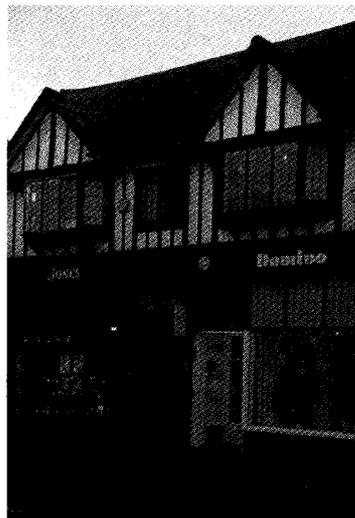


図38 ティンバー建築
Stratford-upon-Avon

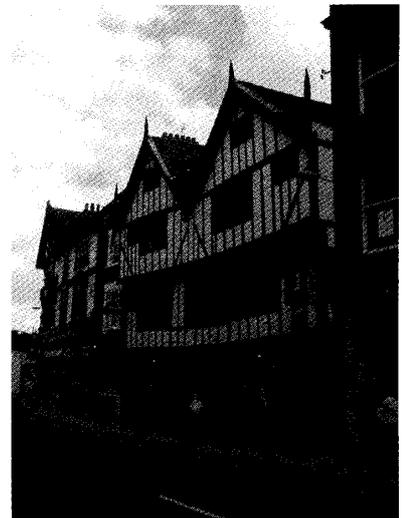


図39 ティンバー建築
York

黒いティンバー材と白いしっくいとの対比が際立つ、木造のティンバー建築も、英国におけるヴィジュアル・エレメントの一つと考えられなくもない。図38はストラトフォード・アポン・エイヴオンで見かけた建物で、現代的なブティックが入っているが、適度に調和している。イングランド北部のヨークでも、同じような建築を見かけた（図39）。このような建築様式の建物が、一つの地域に数棟だけ存在するとか、一つの区画だけに集中して存在するのであれば、ランドマーク的機能をもったヴィジュアル・エレメントと捉えることもできるだろう。しかし、ティンバー建築が数多く見られるストラトフォード・アポン・エイヴオンやヨークでは、ランドマーク的存在とは言いがたい。

建物の色調についても、同様のことが言える。イングランド南西部の町バースでは、この地域で採れる明るい黄色、いわゆる蜂蜜色のライムストーン（石灰石）で造られた建築が町の特徴の一つとなっている。蜂蜜色の建物がわずかであれば目立つだろうが、バースでは町全体にあふれているので、この色の建物というだけではランドマークにはならないだろう。しかし景観という意味では、非常に魅力的な町並みとなっている。

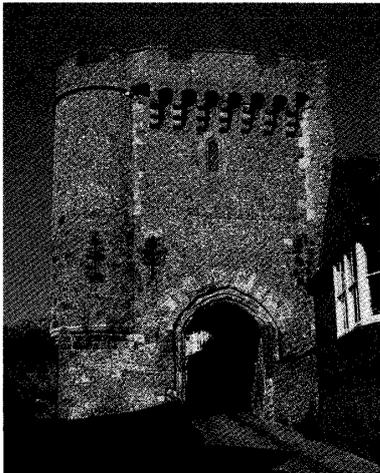


図40 ルイス城跡 Lewes

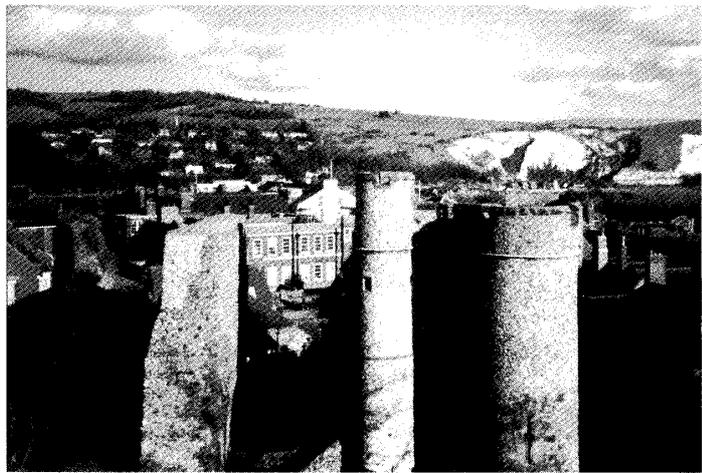


図41 ルイス城跡からの眺望 Lewes

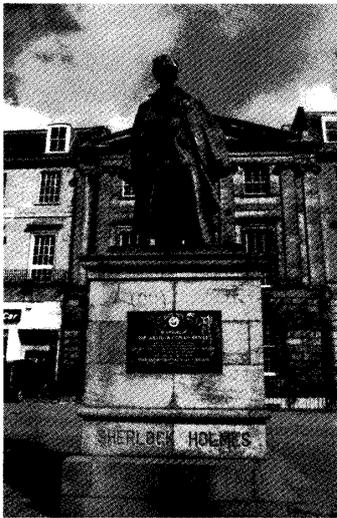
図42 シャーロック・ホームズ像
Edinburgh

図43 黒太子像 Leeds

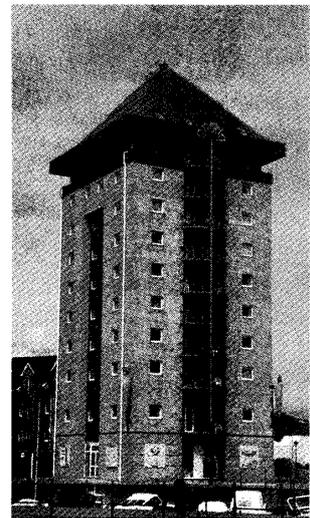
図44 高層集合住宅
Swansea

図59はスウォンジー城跡である。まさにランドマーク的存在である。隣接する現代建築との対比が強烈である。英国には、こうした城跡が多数残っていて、程度の差はあるだろうが、それらの多くは観光に活用されていると思われる。英国王室の居城ウィンザー城などは別格としても、たとえば、イングランド南部の都市ブライトンの近郊にある町ルイスにも城跡があり、主要な観光スポットの一つとして観光客を集めている（図40）。ルイス城跡からは町を一望できる（図41）。しかし、スウォンジー城跡は、観光に活かされているかということ、そうでもないように思われた。

街の中に立つ彫刻も「位置の確認」として機能するだろう。図42はエディンバラの街で見かけた、ポケットパークに立つシャーロック・ホームズ像である。銘に、1859年5月22日、アーサー・コナン・ドイルがこの近くで生まれたとあった。イングランド北部の都市、リーズのリーズ・シティ駅前には、イングランド王エドワード3世（在位1327-77年）の長男であるエドワード皇太子、通称、黒太子（ブラック・プリンス）の像が立っている（図43）。



図45 集合住宅 Swansea

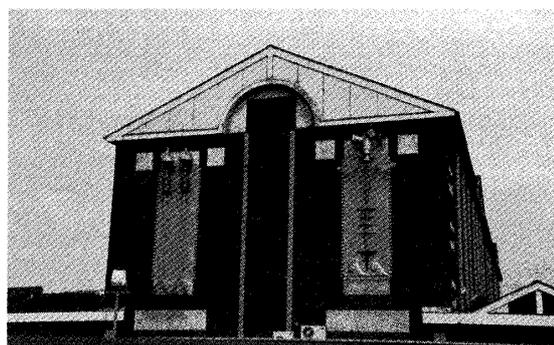


図46 ホテル Swansea



図47 ポンプハウス (レストラン) Swansea

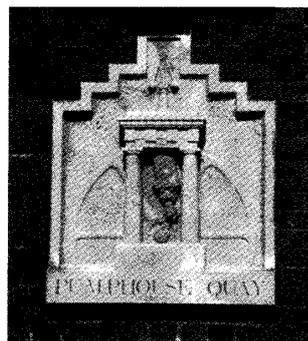


図48 レリーフ Swansea

V ヴィジュアル・エレメントとウォーターフロント開発

ウォーターフロントとは水辺地区や湖岸地区、臨海地区（海岸地区）をいう。ウォーターフロントの開発は、おそらく世界の至るところで取り組まれてきた事業で、一つの流行でもあった。むろん進行中のところもある。新しい建物・施設の建設と、産業遺産としての古い建物の保存と再利用を、どのように調和させていくかが非常に重要であり、また、大変困難な課題である。英国も例外ではなく、既報「英国の臨海地域に見るヴィジュアル・エレメント」で採り上げたブリストル、カーディフ、スウォンジー、リヴァプールの各ヴィジュアル・エレメントも、それぞれのウォーターフロント開発に関係している。

ウェールズ第二の都市スウォンジーは、1970年代から、スウォンジー湾に面したサウス・ドックを中心とした臨海地区の再開発に取り組んできている。ヴィクトリア時代のスウォンジーは、コパロポリス（銅の都市）と呼ばれるほど銅の精錬で繁栄を極めていて、サウス・ドックもその頃の産業遺産である（1859年完成、1969年閉鎖）。

集合住宅（図44、図45）、ホテル（図46）、シンボルとしてのタワー（図62）などが新設されている一方、ポンプハウスを修復・改装したレストラン（図47）など、古い建物が再利用されている。再開発地区が全体として統一感のある空間を形成しているのは、多くの建物の装飾デザインを建築家ロバート・キャンベルが担当しているためだろう。

図48は、ポンプハウスを表した石のレリーフである。このような形式のレリーフが至るところに配置されていた。スウォンジーの臨海地区再開発は、取材した2000年で、その計画の半分ほどを終えていたようである。¹⁷⁾



図49 カーディフ・ベイ・ヴィジター・センター
Cardiff

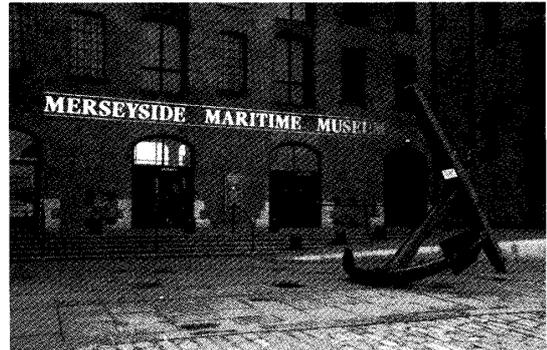


図50 マージーサイド海洋博物館 Liverpool



図51 テイト・リヴァプール Liverpool



図52 ビートルズ・ストーリー Liverpool

ウェールズ第一の都市カーディフは、カーディフ湾に臨むウォーターフロント再開発を大規模に行っていた。大きな屋外彫刻を置いたプロムナード（遊歩道）（図61）、高い白い柱が二列に並ぶ広場（図63）など、未完成と思われたが、広大なものであった。こうした再開発計画の全体像を見せるカーディフ・ベイ・ヴィジター・センターも、ユニークな形で目立っていた（図49）。

リヴァプールも、マージー川に面したアルバート・ドック（図54）を中心として、ウォーターフロントの再開発を手がけている。リヴァプール港の歴史を展示したマージーサイド海洋博物館（図50）やテイト・ギャラリーの分館テイト・リヴァプール（図51）、ビートルズの誕生から解散までを年代順に見せる博物館ビートルズ・ストーリー（図52）の他、ショップやレストラン、ホテルなどがあって、一つのレジヤ・コンプレックスを形成している。ポンプハウスもイン（パブと同類）として再活用されている（図53）。既報「英国の臨海地域に見るヴィジュアル・エレメント」で採り上げたリヴァプールのヴィジュアル・エレメントも、このレジヤ・コンプレックスとその周辺で見出したものである。

マンチェスターでも、ローマ時代の城跡が残るキャッスルフィールドで、運河沿いのウォーターフロントを整備していた（図55、図56）。ロンドンでは2000年、テムズ川南岸バンクサイドにテイト・ギャラリーの分館テイト・モダン（図57）がオープンした。これもウォーターフロント再開発の一つである。老朽化したバンクサイド発電所の建物を、外観はできるかぎり残しながら、内部を大幅に改造して、美術館として再生させたのである。

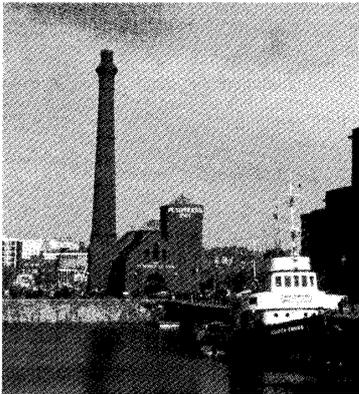


図53 ポンプハウス・イン
Liverpool



図54 アルバート・ドック
Liverpool

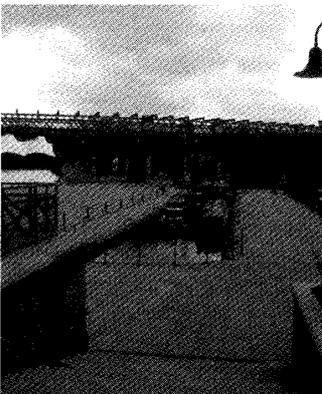


図55 リヴァーフロント
Manchester

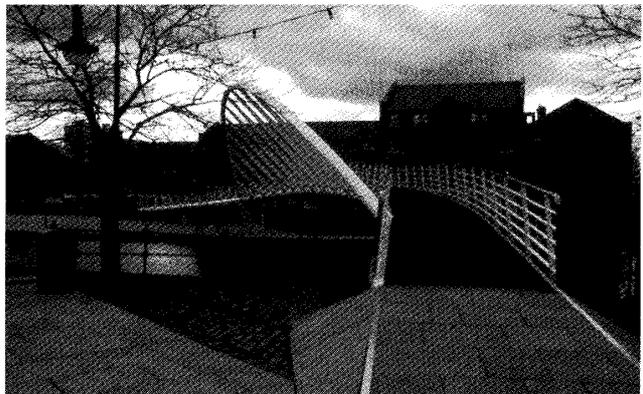


図56 リヴァーフロントの橋
Manchester

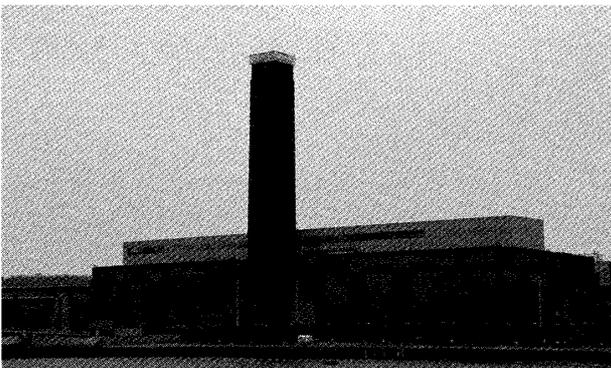


図57 テイト・モダン
London

V 結語

本稿では、英国（イングランド、スコットランド、ウェールズ）で取材したヴィジュアル・エレメントを、「印」「案内および伝達」「位置の確認」の機能によって分類した上で、各事例について考察した。さらに、ウォーターフロント開発と関わりのあるヴィジュアル・エレメントについても、その事例を挙げて考察してみた。

地域のイメージを形成していると思われるヴィジュアル・エレメントを取材してみて、改め

て感じるのは、その地域の積み重ねられてきた歴史を完全に捨て去って、ゼロから新たに何かを創り出すことが、はたして可能なのかという疑問である。渡辺明次は、どの町にも地理的な宿命があるとして、以下のように述べている。

町づくりを調べていくと、不思議なほどその土地の歴史的な事柄が、その地理的条件をベースにして、時代を変えてよみがえってくるのに気づく。…。それは、その居住地の地理的条件や気候条件が社会的要請に合っているからで、その都市の有用性を示すものになる。¹⁸⁾

逆に言えば、地域の再開発には歴史の再認識が不可欠ということである。この観点は、ヴィジュアル・エレメントの創出においてもきわめて重要である。一方、リヴァプールの事例のように、街のイメージは複数あるほうがよいのか、それとも、一つだけのほうがよいのかという問題もある。本研究における今後の課題である。

註

- 1) 織田芳人「英国の臨海地域に見るヴィジュアル・エレメント」『長崎大学教育学部紀要—人文科学』第71号（2005年3月）、p.21-35。
- 2) 西沢健『ストリート・ファニチャー—屋外環境エレメントの考え方と設計指針』（鹿島出版会、1983年）p.105-106を参照。
- 3) 浜本隆志『紋章が語るヨーロッパ史』（白水社、1998年）p.63-64を参照。
- 4) K&Bパブリッシャーズ編『個人旅行25 イギリス』（昭文社、2003年）p.254を参照。
- 5) アト・ド・フリース（山下主一郎・他訳）『イメージ・シンボル事典』（大修館書店、1984年）p.186を参照。
- 6) エイドリアン・ルーム（渡辺時夫監訳）『英国を知る辞典』研究社出版1988年、p.223-224、および、松田徳一郎監修『リーダーズ・プラス』（研究社、1994年）p.1551を参照。
- 7) 松田徳一郎監修『リーダーズ・プラス』（研究社、1994年）p.2187-2188を参照。
- 8) 小稲義男・他編集『研究社新英和大辞典 第五版』（研究社、1980年）p.261を参照。
- 9) エイドリアン・ルーム、前掲書、p.332を参照。
- 10) エイドリアン・ルーム、前掲書、p.200を参照。
- 11) 小野二郎『紅茶を受皿で—イギリス民衆芸術覚書』（晶文社、1981年）p.206を参照。
- 12) エイドリアン・ルーム、前掲書、p.140を参照。
- 13) 石井一郎編著『都市景観の環境デザイン』（森北出版、2000年）p.73-82を参照。
- 14) 「地球の歩き方」編集室『地球の歩き方A02 イギリス』（ダイヤモンド・ビッグ社、2004年）p.99を参照。
- 15) 同上、p.438を参照。
- 16) K&Bパブリッシャーズ編、前掲書、p.412を参照。
- 17) David Wilson, *Swansea Maritime Quarter*, Swansea: City and County of Swanseaを参照。出版年不詳であるが、1995年の開発事例までは明記されている。
- 18) 渡辺明次『世界の村おこし・町づくり—町活性のソフトウェア』（講談社、1991年）p.27から引用。

図版出典（下記の図40以外は著者撮影。）

図40：The Sussex Archaeological Society, *Lewes Castle & Barbican House Museum*, Lewes:
Lewes Castle & Barbican House Museum, 1997の表紙から複写。

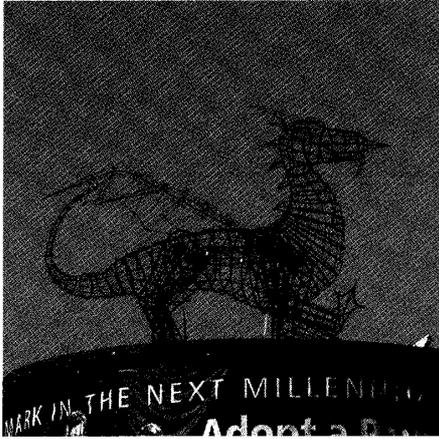


図58 屋上のドラゴン像 Cardiff



図59 スウォンジー城跡 Swansea



図60 観光案内所のサイン Edinburgh



図61 プロムナード Cardiff

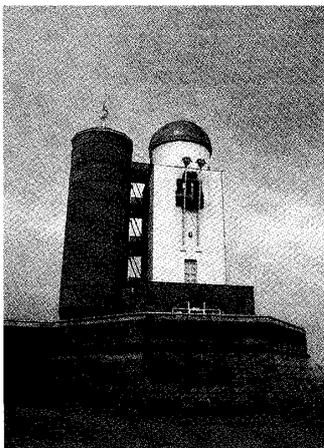


図62 タワー Swansea



図63 モニュメント広場 Cardiff